

【スローガン】

「挑戦」

原点回帰による学び舎の進化

【基本方針】

- 1、組織の内外から信頼を高める
- 2、組織としての在り方を問う
- 3、会員拡大を通して指導力を開発する
- 4、経営における理想と現実を融合する
- 5、感動を通して青少年を育成する
- 6、魅力溢れるまちを創造する
- 7、JCの価値を取り戻す

【JCの価値】

JC活動を行う中で、様々な魅力に触れる機会があるが、そもそも、なぜ我々はJCをやるのか。理由はそれぞれあるが、私は「自己成長」の為と考える。仮にまちづくりを目的とするならば、単年度制ではなく複数年に渡って同じ役割を果たし、事業のクオリティを向上させる確率を高めるべきである。しかし、現在そうではない。では、なぜ単年度制なのか。それは、初めて挑む役の中で、未知の課題に対する適応力を養う機会を得る為である。誤解を恐れずに言えば、我々が取り組むまちづくりや青少年育成、指導力・経営力向上の事業、果ては会員拡大から組織運営、出向活動に至るまで、全ては我々の視座を高める素材にほかならない。強き者が生き残るとは限らない。戦後僅か70年あまり。変わりゆく常識の中で、変化に適応できる力を蓄えるのが、この会の大きな趣旨と捉える。では、その力とは、如何なるものか。

それは置かれた状況によって様々だが、まずは物事を多様な角度から眺められる「想像力」を挙げたい。例えば、何かに失敗したときの言い訳として、つい口から出てしまう言葉に、「想定外」がある。しかし、想像を広げれば、想定外を確実に狭くできる。想定外も想定の内に行えるのだ。勿論、どうしても抗えない状況は起こりうるが、想像を高めて、進むべき方向性を見定める力は、良きリーダーを目指す我々にとって不可欠である。では、その為にJCで何をするのか。

例会や事業、各種大会をはじめ、会に身を置かなければ得られなかった機会は、全てその気付きとなりうるが、最も大事なものは構築にあたる各会議体だと考える。ただ、その中で、かくあるべきというような固定観念は、極力避けたい。体裁を取り繕うような安易な妥協に流されるのではなく、「より目的を適える手段は何であるか」、そして、「選び出した手段はJCとして取り組む必然性があるのか」を委員

会や理事会において、ひたすら本質と向き合って議論すべきであり、それこそが、この会が青年会議所たる所以であろうと捉えている。「果たして、この事業はメンバーに集まってもらうに資するのか」、「掲げた目的にかなうのか」、「市民意識変革を成し遂げられるのか」、自身への問いかけを反芻しながら、お互いの考えをぶつけ合い、事業を磨き上げ遂行する。この愚直な営みが、一人ひとりの成長を促し、そして、この会の価値を醸成していく。

また、それは議論に限らず、誰かの話や言葉のやり取りに耳を傾けるだけでも良い。場所についても、会議に拘らず、膝を交える懇親の席でも良い。得られる機会を実りあるものにするのも、しないのも自分で選ぶことだ。ただ、事業や会議だけに熱くなれば硬くなるし、ひたすら遊んでいるだけなら時間が惜しい。バランスが極めて重要で、それを選ぶのも自分だ。冒頭に掲げた自己成長に言葉を添えるなら、「バランスのとれた自己成長」となる。食生活と同じことだ。

話題を想像力に戻すと、それぞれのコミュニケーションの過程において、多くの人々の言葉から、その背景にある思考や思想まで取り込み、それによって、自身と対話できる内なる自分を徐々に形作っていく。この内なる自分をどれだけ作れるか、その多様性こそが、想像力の源となる。だから、JCにおける在籍年数、そして、切磋琢磨できる豊富な人材は大事だ。時間と密度の両面から、量が質を凌駕して、やがて量は質に転化する。ただ、残念ながら在籍年数については、既に入会している我々には変えようがない。しかし、密度は高められる。それは参加の機会を増やすことと、委員長や副委員長をはじめとする役に挑むことによる。そこには、その機会を得た人だけに現れる景色が必ずある。勿論、やるかやらないかは、自分で選ぶ。誰かにアドバイスを求めたとしても、決めるのは自分であるべきだ。ただし、いずれにしても多くの仲間がいてはじめて成り立つのであって、それに直結する会員拡大が、当会の魅力を高める為に重要である根拠は、ここにある。

そして、想像力を養う上で、もう一点大事なものは、失敗をいとわないことだ。失敗を恐れて抑えるくらいなら、風呂敷を広げて怪我をする方が、想像を高める良い刺激となる。ただ、それは最初から諦める消極姿勢を指すのではなく、ある目的を目指して全力で取り組んで、仮に失敗があったとしても、その経験を通じて得られる何かがあれば、勇気をもって、それを掴み取るべきという意味である。その際、重要なのは良く反省することだ。失敗の原因と正対する反省は、経験を体験に昇華して成長に繋げる。そして、反省はするが後悔はしない。「成功も失敗も全て成果である」という言葉を、JCで耳にするが、苦勞をして失敗する経験は特に価値が大きい。その中には、想像力のみならず、多くの成長の種が必ず眠っているだろう。加えるなら、一つの目的に向かう過程においては、相応の段取りが必要となる。この段取りも想像力に支えられ、そして、想像力が導き出した道程を段取りで支える循環が生まれる。喜んで失敗を受け入れよう。

だから、JCはひとつづくりなのだ。LOMにおける活動だけでなく出向を含め、果てしないフィールドにおいて展開される単年度制により、この会は味わい尽くせぬ成長の仕組みを備えている。そして、この学び舎で研鑽を積んだJAYCEEが、社会や会社で一隅を照らし、やがて、この国を、世界を明るく照らす。かくして、JCが掲げる「明るい豊かな社会」は実現されると信じる。

誤解されないように続けるならば、ひとつづくりは個の資質向上のみを指すのではない。むしろ、己の限りを受け入れた先に、多くの人々の力を集めて、共に進める歩みに要点はある。では、その為には、どのようにするのか。答えは、JCI Creed最後の一文に示されている。

「That service to humanity is the best work of life.」(人類への奉仕が人生最善の仕事である。)

人は誰かの為に力を尽くすときに、自らの限界を超えて、成長していく。JCでよく耳にする「少し背伸びをして」という言い回しは、正にそれを指す。そして、その願いの広がりとは比例するように、より多くの力が集まるようになる。例えば、このまちを良くしたいと願えば、このまちに縁のある人々の力が集まりやすくなり、この国を良くしたいと願えば国中から集まり、そして世界を良くしたいと願えば世界中から集まる。言い換えれば、志の高さということになるが、先に「我々の視座を高める素材」と記した意味は、ここに含まれる。どういうことかと言えば、JCでの活動を通じて、その課題に対して本気になれるのだ。JCをやっているならば、自然とまちづくりについて真剣に考えるようになるし、本会への出向者には、本気でこの国を変えようとしているメンバーがいる。ただ、書物で学んだ知識だけ述べても、力は集まらない。課題と正面からぶつかって、試行錯誤の末、その問題性なりが腹の中に落ちてから、ようやく語る言葉が力を宿し、相手の心に思いが響くようになるのだ。このようにして、JCは数多の機会提供を通じて、確実に一人ひとりの器を育てていく。だから、JCは真剣に取り組む価値がある。そして、その器を大きくできる適齢から卒業の仕組みが導き出され、卒業した後は、育てた器を磨く修練が続いていくのだろうと想像する。

また、共に進める歩みは、JC内の活動だけに留まらない。それは会社においても、家庭においても等しく、その全ての折り合いを含めて、JCだと捉える。JC活動だけがJCではない。この様々な繋がりの中で、ときには砂を噛むような苦しい思いをされる方もいるだろう。

私がJCに入会させていただいてから、僅か五年の時間でさえ、仕事でも家庭でもJCでも失敗ばかりで、楽しい思いより、忸怩たる思いをする方が圧倒的に多い。ただ、その時間を通じて、幾度となく、感謝という言葉の意味が腹の中に落ちてくる瞬間を得られたし、厳しい状況で活動するメンバーに更なる敬愛の念を抱いた。それは、この会と出会わなければ、この時間を過ごさなければ、起こり得なかった価値観の変化であり、決して見えなかった景色だと断言できる。だからこそ、私は幸せだと誰に対しても申し上げられるが、しかし、それは同時に、自らの不足が招いた恥でもあり、そのような人間がこの所信を認めることに迷いがないと言えば嘘になる。そして、その自問自答に答えるならば、選択の連続を歩んでいく人生において、自身が選ぶ一筋の道は常に必然であるという信念と、そう言い切るには、それぞれの場所において、そのときの最善を尽くすよりほかはないと考える。この最善の意味は、満点ではなく及第点に近い。勿論、理想は求めるべきだが、変わりゆく状況においては、これだけは譲れないというラインを明確に定める方が有意だろう。それは鉛筆を削るが如く削り落とし、自身の中に芯を通すイメージである。このように言うと、重く受け止める人がいるかもしれないが、そうではない。

我々は聖人君子の集まりではない。あくまでも、社会の縮図だ。ひょっとしたら、自らの高い理想と比べて、辟易としているメンバーもいるかもしれない。しかし、考えてみて欲しい。誰もが不完全さを備えた多様性の中で、一人ひとりが何かを削りながら、そして、誰かを支えながら、誰かに支えられながら、喩え不格好だとしても、この運動を成し遂げるから尊いのではないだろうか。だから、JCは面白いのではないだろうか。会に誤りがあると思えば、自ら立って改めれば良い。それよりも、自身の限りにおいて、清濁・苦楽の全てを食らって糧にして、それでも前に立ち向かう逞しさが大事だと考える。

JCに打ち込んだ経験が、将来における成功に結びつくかは誰にも分からない。成功の定義は別に議論があれど、自身の成長により、その確率を高めることはできる。むしろ、多くの人たちのおかげで、これだけの機会を得られたのだから、あとは石にかじりついてでもやり遂げるという挟持を養うのが、青年会議所の本質ではなからうかとすら思える。是非、メンバーの皆様には、JCに溢れる機会を存分に堪能していただきたいと願うし、また、この会に対しては、将来に渡って、圏域の青年たちを受け入

れるに足る学び舎であり続けて欲しいと願う。

ここに至るまで迷いながら挫折しながら、しかし、この一念に突き動かされながら、そして、こんな小さな人間の背中を支えてくれる厳しくも優しい人たちに導かれながら、ようやく、不惑の入り口に臨む。いつ終えるとも知れぬ人生。奇跡とも呼べる必然の出会いに感謝を申し上げ、皆様と共に見たことがない景色を眺めに行ければ、これ以上の幸せはない。

【組織の内外から信頼を高める】

運営は組織の要である。議論の余地もない自明の理と思われるかもしれないが、では、なぜ組織運営は重要なのか。それは端的に言えば、組織として力を発揮する為である。一人ひとりでは微力であったとしても、力を合わせれば、より大きな力を生み出せる。しかし、集まる人が多くなるほど、人数が増えても、単純には大きな力に結びつかないパラドックスが生じる。

例えば、ある会社をイメージして欲しい。社長はあなただ。社員が10名であれば、社長であるあなたの意思や目的を社員全員に伝えることは、そう難しくない。一堂に会して、全員の課題を吸い上げ、情報を共有するのも容易いだろう。しかし、会社が成長して、50名、100名、200名と増えた場合はどうだろう。恐らく、途端にあなたの思い通りにはならなくなる。どれだけ優秀な人も、一人で全てはできない。そして、多くの人が集まり、適切に力を合わせられれば、より大きな力を生み出せる。だから、運営は組織が継続する過程において、必要な一つの心得であり、その目的を果たす為に不可欠なのだ。では、その内側で、どのようにするのか。

まずは、ある問題に対して、組織として対応するか否かを分けるところから始まる。そもそも問題として切り出せるスキルが別に必要となるが、それを差し置くと、対応を分ける際は案件のみを捉えるのではなく、関係しうる条件を鑑み、近きをはかり遠きをはかる。また、対応する場合もしない場合も、如何にしてやるのか、如何にしてやらないのかを決める。そして、その決定を段取りでしっかり裏打ちして、役割と権限を移譲しながら遂行に結び付ける。このようにして、組織のバランスとなり、リソースの最適化を図りながら、滑らかに運んで行く。さながら、乗り心地の良い車で目的地に向かうが如くだ。辿り着く道はいくらでもある。

当会議所においては、定款・諸規程をはじめとする成文・不文のルールを踏まえたガバナンスと、社会的責任を満たすコンプライアンスが判断の拠り所となる。いずれも、良く把握して運営に当たるべきであるが、内部の決まりごとについては、その根拠を確かめながら、変えるべきは変える姿勢が重要だ。ただ闇雲に遵守するのではなく、この組織にとって、何が大事であるかを問い続けるべきである。そして、もう一つ留意すべきは、全ての委員会の担いを俯瞰することである。単一の委員会や事業の中で整合性を図るのではなく、全てを同じテーブルに並べた上で、時間・予算・人員の面からリソースを最適化する。この調整がなければ、必要以上の事業費集めが発生したり、スケジュールの無理が生じたりする。それも修練だと言う声が聞こえてくるが、やや乱暴に感じる。やはり、メンバーの機会提供に対する運営の責任は大きい。全てのメンバーに思いを寄せて、より効果的な成長の機会を創出できるよう、真摯に運営と向き合い、大きな絵を描くべきだ。

加えて、2017年度から取り組んでいるブランディングについては、都城青年会議所の魅力を更に引き立てる為に、継続していく。表現を変えれば、「ファンづくり」であるが、これは一時で終わる取り組みではない。無論、果てしなく自己成長できる学び舎としての土壌づくりと一人ひとりのJAYCEEとしての成長が最優先すべき課題であり、ブランディングの展開は、その延長にある。これは単体で

の活動もありうるが、組織運営と同様、年度内に実施する例会・事業を良く活かしながら、組織として、圏域における信頼を高めるに努める。

組織運営とブランディングの両輪をもって、組織の内外に対して、安定と信頼をもたらし、我々の運動が花開く礎となる。

【組織としての在り方を問う】

1964年2月26日、この地に青年会議所の灯がともされた。明るい豊かな社会を目指して、貴重な青年期の英知と勇気と情熱を注ぎ込み、連綿と時代を紡いで来られた先輩方に、衷心より感謝と敬意の念を申し上げる。そして、創立55周年を迎える今日においても、先人と志を同じくできる喜びを享受しながら、同時に、先人が積み上げられた覚悟に恥じないJAYCEEたらんと自戒の念を新たにす。節目で顧みるべき心構えは、第50代理事長山崎忠芳先輩が「感謝と継承」と万全と示されたが、次の節目にあたっては、僭越ながら「不易流行」を添えたい。解釈は様々あれど、この組織に当てはめれば、時代に応じて変化を求め続けてこそ、会の価値は不動になり、その永続性は保たれるものと捉える。また、その著では不易と流行の句を挙げて、「是れを二つに分けて教え給へども、其元は一なり」(『去來抄』)と、両者の根本的な同質性を掴んだ正眼は、時を超えてなお、我々に気付きをもたらしてくれる。いずれにせよ、我々は変わらなければ生き残れない。

本年は公益社団法人として7年目を迎える年にあたる。公益法人制度改革に際し、JC運動こそは公益であるという信念の元、認定申請を進めた決断は、当会にとって、尊い前進の道筋であったのは一瞥も疑う余地はない。しかし、その後は交わした不平等条約の中で、事業構築する苦渋を強いられる。そもそも、新しく定められた認定法に対し、誰もが不十分な解釈の内に過剰な縛りを設け、メンバーの会費で成り立つ脆い財務基盤を侵食していった。

具体的には、収支相償をマイナスにする為に事業からの収益は控えつつ、会費から公益事業費への繰入を増やし、かつ、公益事業比率を維持する為に、予算規模の大きな公益事業を増やし、同時に指導力開発や家族交流等の対内事業の支出を減じた。結果として、法人格を維持しなければならないというバイアスによって、本来、背景と目的から導き出される手段であるはずの事業が目的化し、運動の大義とバランスを損なっていった。2015年度から主催させていただいている花火大会の実施、及び共催事業に対する支出を公益の費用として認めていただく等、県との折衝を経て、財務基準に対する基礎代謝を上げ、現在では、公益社団法人に課せられた財務基準を安定的に満たせる状態にはなっている。しかし、この会が本来有していた魅力を取り戻すには、まだ開きがある。

対内外問わず、如何なる事業であっても、メンバーがこの事業に取り組むに資すると判断して、初めて発露すべきであって、公益社団法人格を維持する為に、かくあらねばならないとする発想自体が、本質を歪めている。「公益社団法人として」という枕詞を耳にするが、我々は公益社団法人である前に青年会議所である。そのことを決して見失ってはならない。昨年度より、ようやく本会においても、JC独自の法人格立ち上げを見据えた法改正を立法府に提言する運びとなっているが、いささか不条理を感じる。国は、公益社団法人とは別に一般社団法人を予め用意しており、JCだけを特別扱いするロジックは、内部では理解を得られたとしても、やはり社会的合理性に欠ける。

詰まるところ、我々が目指す時代に即した公益と国が求める公益は、根本的に相容れないのだ。申請ベースで承認される事業計画から、国は継続事業こそが公益と捉えていることが理解できる。圏域に対する事業の認知度等を鑑みれば、国が求める公益の在り方は極めて妥当であるが、不連続の連続と称さ

れる青年会議所運動とは相性が悪い。一旦提出した申請に、以降の運動が制約されるのは、将来の柔軟な発想を損なうし、それを回避する為に、申請を都度出し直すのは、次年度事業計画との整合性においてのみ申請が受理される現在の仕組みから、それに掛かる事務工数と次年度事業計画策定のスケジュール上、無理がある。我々には、もっと成すべきことがある。

勿論、公益社団法人という冠を有することにより、税制上の優遇や事業に対する資金を得やすい優位性があるのも一方では事実であり、公益社団法人格を維持する功罪をメンバーの皆様と共有し、その上で、いずれの道を選ぶかをお諮りする機会を設けたい。

【会員拡大を通して指導力を開発する】

先にも触れたが、なぜ、会員拡大は重要なのか。ダイヤモンドの原石はダイヤモンドでしか磨けないのと同じように、人は人でしか磨かれない。そして、それを担保するには、多くの同志と共に運動に取り組むほかになく、気が置けない仲間内だけでJCをやるのは、あまりにも勿体無い。

では、なぜ、拡大できないのか。これには複数の理由があるが、まずは動機付けの問題がある。ひたすら、拡大は大事だと唱えてみても、拡大の為に拡大は本質を捉えていないし、それでは人は動けない。JCが自己成長できる学び舎であり続ける為には、多様な人材の中で切磋琢磨できる環境が不可欠であり、だからこそ会員拡大は重要なのだ。そして、もう一点は、拡大をしていない。これは動機付けとリンクするが、単純に言えば、一人のメンバーが一人の入会者を迎えば、会員数は倍になる。控えめに見て、二人のメンバーで一人の入会者を迎えても、半分は増える。そして、ただそれだけのことが難しい。それはなぜか。

そもそも意識の中にない、意識はあっても日々の忙しさに流れていく等、諸々事情はあるが、根本はJCの魅力が語れない迷いが原因だろう。仕事上の力関係を持ち込んで、無理やり入会させたり、会の内容を偽って入会させたり、過度にへつらったりするのは論外だ。ただ、自分が信じる魅力を良し悪し含めて語って、それに共感してくれる人を迎え入れるだけで良いのだ。それがご縁であり必然である。拡大は見方を変えれば、企業の営業活動と似ている。商品を知らなければ魅力を語れないし、偽って売りつけばクレームになる。拡大の為に、会の魅力をメンバー一人ひとりが熟知してから臨むべきであるし、拡大には指導力の要素が多分に含まれる。民主的に目標に協力していく組織運営能力の研究及び実践とされる指導力開発にあたって、これほど純粋なテーマはないだろう。一人一人も自分の言葉で口説けずに、指導力を語れるはずもない。そして、圏域の青年経済人が集い、日々切磋琢磨する我々に、それができないはずもない。

拡大は本年だけの課題ではなく、組織の根幹に関わる唯一永年の取り組みであるべきだ。しかし、このLOMにおいては、拡大の仕組みが組織内に備わっていない。だから、年度によって動きに振れが生じる。まずは、この拡大できる仕組みを根付かせる。要点のみ申し上げると、事業年度と拡大活動の時期は同じではない。予定者段階から前年度体制と協力体制を組んで、候補者のリストアップを行うところから始まる。そして、年度明けから動き出せるように、誰がどの候補者に対して、どのタイミングでアプローチするかの計画を策定し、遅くとも年度の半ばには目標達成を目指す。それ以降は、次年度の準備期間に入り、実施した仕組みをスパイラルアップして次に繋げる。

もう一点大事なことがある。それは入会したメンバーが、JAYCEEとして成長できる仕組みづくりである。言い換えれば、入会者のアフターフォローだ。勿論、配属先の委員会で、様々な機会を掴み養われるのが自然な流れではあるが、その働きを強化する仕組みが、同時に必要である。それは別に機

会を設けるやり方もあるし、既存の効果を高めるやり方もあるだろう。ただ、留意すべきは、一過性の仕掛けに終わらせず、一定のルールに則って、定期的実施する仕組みの設計だ。

継続して拡大できる仕組みづくりと入会者の自己成長を加速させる仕組みづくりという二つの課題を通して、メンバーのみならず組織そのものを、より高みに導き、それをもって「LDの都城」再興の一里塚とする。

【経営における理想と現実を融合する】

経営力という課題に対して、JCとして、如何に取り組むか。これは難しい問題である。理由はいくつかあるが、まずは、会社の業種も異なれば、規模も置かれた立場もまちまちのメンバーが集う中で、全てのメンバーに実りある機会を願えば、ちょうど良い焦点を見出すには、相応の敷居がある。例えば、経営に際して、数字を読み解くスキルが大事であるのは、誰も否定しないだろうが、ありふれた会計入門であれば、既に実務で扱っているメンバーには物足りないし、テクニックに偏れば、業種や規模等により、当てはまらない部分が出てくる。そもそも、本を読んだり、インターネットで情報を集めたりして得られる知識は、自ら選んで獲得すべきであり、JCで取り組む事業足り得ない。勿論、それは決して、読書や情報収集の価値、例として挙げた数字を語るの重要性を否定するものではない。様々なツールを通じて知識を蓄えることは、我々の経営力を高める為に不可欠なアプローチの一つであるのは相違ないが、ただそれだけに留まれば、JCの事業として取り扱うには必然性を欠くという意味だ。では、その点睛は如何なるものか。

それは知識を実践に移す落とし込みである。その落とし込みにより、獲得した知識が、ようやく実行力を有する知恵に練り上げられる。ただの勉強会であれば、知識欲を満たす自己満足に留まる。そのような罠に陥らぬよう、我々は常に実践家であるべきだ。事業の構築にあたり、限られた機会と時間の中であっても、せめて兆しは集った全てのメンバーに持ち帰って貰えるお膳立ては整えるべきであり、それは経営力の取り組みに限らず、全ての事業において、常に確かめる責務がある。それがJCとして事業に取り組むことの必然性だ。

では、何がテーマであるべきか。経営の神様と称される松下幸之助氏、経営破綻したJALを僅か三年で再建した稲盛和夫氏、豊田章男社長が学ぶ塚越寛氏。世を見回せば、数多の名経営者がいらっしやる。そして、彼らが我が会社を経営したら、どのような会社になるだろうと想像してみる。恐らく、今、頭の中に浮かんだものこそが目指すべき標である。例えば、松下幸之助氏は、「まず経営理念を確立すること」の大切さを説かれる。そして、経営理念について語られた氏の金言をお借りするなら、「経営理念が単なる利害、単なる拡張というだけではいけない。それらのことが、いわば何が正しいかという人生観に立ち、かつ社会観、国家観、世界観さらには自然の摂理というところから芽生えて来なければならぬ」と示される。それは人生観すら超えて、自然の摂理にまで至る。だから、その正しい経営理念は普遍的であるし、我々がそれを学び実践して、この圏域にそのような素晴らしい会社が溢れる未来へ挑戦することには、価値がある。

「道徳なき経済は罪悪であり、経済なき道徳は寝言である」という古言を引き合いに出すまでもなく、理想と現実の折り合いを如何にして図るかは、経営の要点となる。綺麗事だけでは潰れてしまうし、金儲けだけに拘れば卑しくなる。その両者を貫くのが、松下幸之助氏が説かれる正しい経営理念であり、稲盛和夫氏が語られるフィロソフィであり、そして、塚越寛氏の「いい会社をつくりましょう」という社には、それに対する誓いが込められているのだと捉える。優れた理念は、会社に活力をもたらし、

そして、そこには永い生命すら宿す。決して失ってはならない。

経営におけるバランスと、その課題にJCとして取り組むバランス。その両方の秤を釣り合わせる実践は、人間の本質さえも詳らかにえぐりながら、経営力の根底を養い、やがては、それぞれが思い描く理想と現実を融合する。

【感動を通して青少年を育成する】

子は宝である。生まれるときは、健やかであってくれさえすればというささやかなる願いが、子が成長するにつれ、果てしなく広がっていくのが親の常だ。健康で強い体であって欲しい。誰からも愛される人柄であって欲しい。正しきが分かる賢さが欲しい。注意に耳を傾けられる素直さが欲しい。人の痛みが分かる優しさが欲しい。どんな困難にも挫けない強さが欲しい。その願いに限りはない。全ては子に幸せな人生を歩んで欲しい一心故であるが、同時に、それは親のエゴではないか、過保護になり過ぎていないか、多くを望み過ぎではないかと、少しためらうときもある。ひたすらに愛情を注ぐのが良いのか、それとも、少しばかり厳しさを教えるのが良いのか、常に迷いがつきまとう。同じ歳の子であっても、一人として同じ子はいないし、誰も同じ人生は歩めない以上、そこに唯一の正解はありえず、だからこそ背中を見せられる親として成長しようと努める。

青少年育成という課題に対して、JCとして、如何に取り組むか。それは、親として子に提供したいと願う機会と基本的には同じであるが、前提として、文部科学省が示す学習指導要領を拠り所とする。指導要領では、その理念として「生きる力」を掲げ、それは「知・徳・体のバランスのとれた力」と定義付ける。「知」は確かな学力、「徳」は豊かな人間性、「体」は健康・体力としており、いずれも子どもの健やかな成長には不可欠で、目指すべき方向性に相違ない。では、その理念に対して、JCとして加えるべきエッセンスは何であるか。

それは、子どもたちの心を揺り動かすことだと考える。家庭や学校、それ以外の場所を含めて、様々な学びの機会を既に得ている子どもたちに対して、我々が何をすべきか思いを巡らせると、やはり、非日常に心躍らせる楽しさや途中で投げ出したくなるような厳しき、その結果として得られる言葉では表しきれない達成感といった瞬間が必要ではないだろうか。彼らが大人になって、少し人生を振り返ったときに、その心の一つのページに記憶を残せる機会提供でありたい。

また、これまで都城JCでは、子どもたちの健全な心と体を育む事業として、「きりしまんぢだジュニアトライアスロン大会 in 都城」を開催しており、圏域の方々のお力添えもいただきながら、発展を遂げてきた。当大会は、我々が行う中核事業の一つであるが、おかげ様で、昨年度10回目の節目を迎え、青少年育成事業においても、ようやく新しい種を蒔くタイミングがやってきたと考える。この事業に限らず、いかなる素晴らしい事業であって、喩え、そこに時々工夫を盛り込んだとしても、毎年続けて行けば、やがてはルーチンワークが増え、それと比例するように、我々の運動目的からは徐々に離れていく。継続することの尊さは誰にも否定されないが、しかし、それは同時に、ほかのより良い事業を追求する可能性を小さくしているのも同じように否めない。喩え不器用だと評されても、我々は常に挑戦し続けるJAYCEEでありたい。

従って、当事業については、実行委員会に大会主催を移管し、その上で、会として大会を支援していく。ただし、あくまでも主は実行委員会であり、我々は従である。新しい事業に取り組めるリソースを確保しながら、かつ、これまでと同様、子どもたちの汗と涙に資する大会を開催できるよう整える。

我々は感動を通じて、より鮮明に「生きる力」を子どもたちのしなやかなる感性に涵養し、いずれま

た、新しい感動の種をこの地域に必ず生み出す。

【魅力溢れるまちを創造する】

J Cとして、なぜ、まちづくりに取り組むのか。理由は極めて単純である。家族と共に住み暮らし、そして、我が会社も生業を営ませていただいている圏域を、少しでも良くしたいというささやかだが、ただ明確な意思である。しかし、そのシンプルな動機付けとは裏腹に、J Cとしてまちづくりに取り組むこと、もっと言えば、まちづくりという課題そのものには、相当の難しさがある。日本各地において、なかなか思うような成果を上げられていない現状を見る限り、それは明らかだが、では、その難しさは何に起因するのか。

原因は幾重にも絡み合うが、理由の一つとして、まちづくりに対する社会的な先入観があると考えられる。木下斉氏が指摘されるように、本来、地方創生は利益があって持続可能な「事業」であるべきである。しかし、このような公共性を伴う取り組みに対しては、利益を出してはいけないという固定観念が官民共に根強く、それ故、それに掛かる資金が一過性の性質になりやすい。一旦使い切って、次はまた資金集めから始まる。社会に余裕がある時代はそれで良かったのだろうが、様々な情勢変化に伴い、無理が生じてきており、今はその常識が移り変わる過渡期と捉える。恐らくは、幾つかの成功事例の積み重ねにより、氏が提唱するようなまちづくりの在り方が当たり前になってくるだろう。従って、現段階においては、まちづくりの本質に適う取り組みと、これまで携わらせていただいた地域活性化の取り組みのバランスを図ることが肝要になってくる。

まず、前者については、追求すれば社会起業になるが、その前段として収益事業の実施を足掛かりとする。勿論、公益社団法人においては、収支相償の縛りがあるので、その均衡の限りにおいてであるし、地域貢献性や事業内容の妥当性については、委員会、及び理事会において、吟味する必要がある。このように言うと、手段が目的になっているように取られるかも知れないが、そうではない。度々になり恐縮だが、松下幸之助氏の言葉をお借りすると、「企業は、本業を通じて社会に貢献する。利益とは、社会に貢献したことの証である。」そして、こう続く。「企業が多くの利益を得たということは、その利益を使ってさらなる社会貢献をせよとの世の声である。」この言葉は、企業の目的は社会貢献であり、利益はその手段であるという関係性を整理しながら、それと同時に、企業に対する両者の重要性をいずれも立てている。そう言うと、まちづくりは企業活動と同じではないという声も聞こえてくるが、詰まるところ、その境界が曖昧になっていく過程が、先に過渡期と記した意味に含まれる。即ち、企業活動もまちづくりも、目的は社会貢献であって、その継続には、世に認められた証となる利益が不可分なのだ。

次に、後者については、従前と大きくは変化しないことが大事と考える。都城盆地まつりや島津発祥まつりをはじめとする共催事業についても、主催団体との調整の上ではあるが、例年通り、共催としての役割に務めさせていただきたい。我々は我々だけで成り立っているのではなく、その様々な繋がりに感謝を申し上げながら、それぞれを慮りながら、組織としての立ち位置を丁寧に立脚していくべきである。これは、まちづくりの観点より、組織としてのスタンスによる。また、本年で4回目を迎える「肉と焼酎のふるさと・みやこんじょ花火大会」は、内外の皆様へ感動をお届けできる核となる事業であるが、その影響により、同日開催される都城焼肉カーニバルの夕刻以降に、来場者の滞留が発生し、実行委員会の皆様に対しても、会場に足を運ばれた方々にも、ご不便をお掛けしている課題がある。この点に関しては、行政及び実行委員会の皆様と調整の上、今後の更なる発展に向けて邁進させていただきたい。

我々は、まちづくりにおける本質と調和をもって、魅力溢れるまちを創造する。

【JCの価値を取り戻す】

この所信に記すのは、JCにおける様々な機会や出会いが私に教えてくれたことである。論の飛躍や破綻については、表しきれずに申し訳なく思うばかりだが、最高の時間を与えてくれたこの会に、そして、敬愛してやまない先輩方、共に活動する同志、未だ見ぬJAYCEEをはじめとする皆様、我々を支えてくださる皆様との必然、かつ奇跡的なご縁に、万感の思いで感謝を申し上げる。だからこそ、冒頭にも申し上げたが、メンバーの皆様には、ご自身で定める限り、会に溢れる機会を満喫していただきたいし、この会には、将来の同志を迎えるに足る学び舎であり続けて欲しいと、切に願う。何より、それに向かって挑み続ける我々の運動こそが、永劫にわたりJCの価値を高め続けると信じる。

ときに、「JCしかない時代からJCもある時代になった」と揶揄されることがある。それに論ずる前に、田坂広志氏が、その著書にて、物事の本質を洞察し、未来を予見する為の哲学的思索として取り上げるドイツの哲学者ゲオルク・ヘーゲルの弁証法から「螺旋的発展の法則」を紹介する。

これは、「物事は直線的に発展するのではなく、あたかも螺旋階段を登るようにして発展する」という法則である。そのまま、螺旋階段を登るイメージをして欲しい。階段を登る姿を横から見ると、上に登っているのに、視点を変えて上から見ると、柱の周りを回っているように見える。即ち、上へ登る様子は「進歩・発展」を、柱の周りを回って元の位置に戻る様子は「復活・復古」を表しており、それは「進歩・発展」と「復活・復古」が同時に発生することで、古く懐かしいものが、新たな価値を伴って復活する法則を示している。例を挙げると、離れた場所に情報を伝達する手段として、かつては文字による手紙が中心であったが、やがて音声による電話が発明され普及した。そして、近年においては、インターネットにおけるメールやメッセージツールの出現により、文字によるリアルタイムのやり取りができるようになってきている。これは文字で情報を伝える手段が、技術革新により即時性・双方向性という新たな価値を付加して現れたものである。

これは、あくまでも一例であるが、この螺旋的発展から、「JCもある時代」の次の時代が見えてくる。お互いに切磋琢磨しながら限りない自己成長を求め、その結実として正しい志を身に付け、そして、それを実現する実行力を鍛えた人材を輩出する学び舎としての価値を磨き上げた「JCしかない時代」の訪れであり、それは学び舎としての進化によりもたらされる。この「JCしかない」という表現は、ひょっとしたら偏狭な身内びいきに映るかもしれない。しかし、創立から半世紀を超えてなお、ひとづくりとまちづくりのバランスにこれだけ腐心し続け、それを包容し続けた組織がほかにあるだろうか。これは、この会が絶えず重ねた修練により、ようやく辿り着いた境地であり、それはまた、公益に偏った秤の揺り戻しにより自ずと訪れる、JCが本来有する唯一無二の価値への原点回帰にほかならない。ただ、誤解しないでいただきたいのは、このことは、我々がまちづくりを諦めるという意味を指すのではない。今後も、我々がそれに資すると判断する活動には、青年らしい大胆な発想と情熱をもって取り組みながら、かつ、人生最後の学び舎として、優れた人材を輩出する営みの昇華により、これまでも増して、より力強くこの圏域を輝かせ、ひとづくりとまちづくりという課題に対して、いずれの本質にも正対しようとする意思の表れである。

この会で力を培った一人ひとりが、地域にかけがえのない人材として縦横無尽に活躍し、そして、明るく豊かな社会の実現に貢献する頼もしい未来が、私の眼前には、ありありと広がっている。

【結びに】

スティーブ・ジョブズ氏が、かつてスタンフォード大学の卒業式でスピーチした一節である。

“If today were the last day of my life, would I want to do what I am about to do today?”

(もし、今日が最期の日だとして、今からやろうとしていたことをするだろうか。)

絶対はない世において、唯一絶対と呼べる死を通して、生を見つめる死生観は重要な観点である。なぜならば、それは後悔のない選択を必ず求める。そして、もう一方で思い巡らせるべきは、無限とも言える宇宙の悠遠さだ。壮大な宇宙の時間的・空間的広がり、それと比べれば、瞬きと変わらぬ一生が重なり合うご縁のありがたさを教えてくれる。

この二つの極点は、様々な気付きをもたらすが、つまりは如何に生きるべきかを我々に示唆する。いつかは終える一度きりの人生。どのような道を選んで、それがどのような道に繋がったとしても、全ては必然であり、その全てに意味はある。この会で志を高め合い、お互いに悔いのない人生を全うできることをご祈念申し上げ、そして、その実現に向けて、全身全霊をもって挑戦する覚悟をお誓い申し上げ、私の所信とさせていただきます。

見たことがない景色を、一緒に眺めに行こう。